

集合住宅団地における共用空間のあり方とコミュニティ形成の可能性に関する考察
 ～ソウル上湊住公アパート、高德住公アパート、及び赤羽台団地の実態調査を通じて～

A study on ideal way of common space and possibility of community formation
 in apartment complex

～Through the investigation of Seoul Sanggye Jugong apartment,
 Godeok Jugong apartment and Akabanedai apartment ～

10423003 五百原沙織

主査 篠原聡子助教授

副査 沖田富美子教授

副査 佐藤克志助教授

共用空間、コミュニティ、ネットワーク、集合住宅団地、老人亭
 common space, community, network, apartment complex, noinjeng

第1章 序論

1. 研究背景と目的

日本において、集合住宅が全国で大量に建設され始めたのは、戦後10年を経た昭和30年ごろからで、主に郊外に大量に建設された集合住宅地「団地」があらわれ始めた。団地づくりは初期からコミュニティが意識され、特に配置計画においては、北入り住棟と南入り住棟をペアで配置し、コミュニティ単位をつくろうとした「NSペア」や、子供を介したコミュニティを意識した「プレイロット」の設定、それらが連続していった「緑道」といった新しい設計手法が次々生み出された。住宅不足の解消と品質の向上をめざし、標準設計による均質、均一化された住宅を大量に建設したのが昭和30、40年代であった。

昭和50年代に入り、住宅不足も解消され、集合住宅の分野も「量から質へ」と、テーマが移っていく。

ストックの時代となり大規模団地の再生を考えるにあたり今再び昭和30年代、40年代のコミュニティ設計手法が、再認識されつつある。

コミュニティは現実の都市や農村の地域社会を示すと共に、高度経済成長後の日本社会の社会目標として1970年代に提起されたものである。今回の調査研究における「コミュニティ」とは、住民が主体となり、日常生活圏の中での自治活動、まちづくり活動やそのネットワークまでを捉える。コミュニティに対する新たな見直しがなされている現在、そのコミュニティ形成に建築計画がいかなる役割を果たし得るかは大きな課

題である。

本研究では、コミュニティと共用空間の実態、問題を解明するにあたり、海外を含めいくつかの事例を調査する。海外調査として韓国のアパート団地を研究し、日本と韓国の集合住宅の比較を行う。研究対象として、日本においては東京23区内で初の大規模団地である赤羽台団地、韓国・ソウルにおいては大韓住宅公社によって供給されたアパート団地を取り上げる。韓国・ソウルとの比較を通して、共用空間の使用実態の把握と、そこから生まれるネットワークについて知見を得、共用空間の新たな可能性を発見し、コミュニティ形成と共用空間のあり方を模索することを本論文の目的とする。

2. 研究概要

韓国ソウルで大韓住宅公社^(※1)によって供給された住公アパートにおいて、団地を直接訪問し、実態調査、ヒアリング調査、アンケート調査を実施する。共用空間（老人亭、管理事務所、教会、公園等）を中心に調査し、そこから生まれるネットワークやコミュニティ形成について、その特性を追究する。コミュニティ形成と共用空間の関係、中間集団の活動拠点としての共用空間の果たした役割など、中間集団にとって、そして住民にとって有用な共用空間のあり方を追及していく。

(※1) 1941年朝鮮住宅営団(朝鮮住宅営団)で創立され、1948年政府樹立とともに大韓住宅営団と改称。1962年7月1日

大韓住宅公社法によって発足された政府投資機関。

3. 本論文の構成

本論文は序論、本論、結論の3章で構成されている。

(図1)

1章においては、本研究の目的や韓国の住宅事情、日本と韓国の集合住宅の変遷を示し、2章においては1～5節で調査概要、調査結果を記し、6節で全体的に分析し、日本の赤羽台団地と韓国ソウルの住公アパートとの比較を含めて考察する。

3章においては、本研究を通じて考察される、韓国の集合住宅団地におけるコミュニティ形成と空間の関係性、共用空間の可能性について言及する。



図1. 本論文の構成

第2章 本論

1. 調査概要

1.1 調査対象の抽出

日本の隣の国である韓国は、文化においていくつか日本との共通性を持っている。

近年、韓国では、政府の政策として集合住宅の大量供給が推し進められ、かなりのスピードでアパート団地が建設され続けている。この韓国の住宅供給の背景は、戦後の日本の住宅政策と類似する点がある。つまり、公的な住宅政策によって、福祉住宅だけでなく、中間層の人たちに対する住宅供給がなされているとい

うことである。そこで、経済状態や文化も日本と近い韓国の、集合住宅における共用空間を調査し、日本と比較をすることで、共用空間や住戸内空間等に対する新しい知見を得、見識を広めることができるのではないかと考えた。

調査対象として、公団赤羽台団地と供給体制、築年数、規模、立地条件等が類似しているアパートを搜索し、大韓住宅公社が建設したもので、築20年程経ったソウル市郊外の都市型アパート団地を取り上げることとした。

日本に比べ韓国のアパート団地の歴史は浅く、1980年代から大量供給が始まり、1990年代後半から急激に開発が加速している。日本の公団のように、中間層に対して住宅を供給している大韓住宅公社（大韓住宅公社は低所得者向けにも住宅を供給している）のもので、大量供給され始めた時期の事例を取り上げる。その中で、公団赤羽台団地と同様に中間層を対象としたであろうソウルの上溪、高德洞の住公アパートを調査対象として選定した。

1.2 調査方法

アパートの現状を詳しく認知するため、実際にソウルの上溪住公アパート、高德洞住公アパートを訪れ実態を調査する。アパート内の共用空間の利用状況や使われ方などにおいて目視による実態調査や、共用空間についてのヒアリング調査、アンケート調査を行う。

(1) 実態調査

アパート団地内の様子を歩きながら視察し、人がよく集まる場所や、ごみ置き場、駐車場等の様子や問題を探る。特に中庭や公園などの共用空間を重点的に調査し、どのような人が利用し、どのように使われているかを調査する。

(2) アンケート調査

団地内の教会、託児所、住宅を直接訪問し、居住者の共用空間の利用実態と共用空間に対する意識を、このアンケート調査を通じて回答してもらった。教会においては、団地外の教会にも依頼し、住公アパートの住民に回答してもらった。

日本の集合住宅団地と比較するため、赤羽台団地で

行ったアンケート調査と同じような内容とした。

実施期間：2005年10月1日～11月8日

(3) ヒアリング調査

公園や中庭、老人亭等が集まっている人たちや、紹介してもらった人たち等、アパート住民を対象に、直接インタビューを行った。住民以外では、管理事務所の方に話を伺うこともできた。

居住歴を中心に、アパートに入居した動機、アパートでの暮らしや他の居住者とのつながり等を伺った。

調査期間：9月27日～10月1日、10月7日～10月11日、11月3日～11月8日

<ヒアリング内容>

- ・ 居住歴・住居
- ・ 共用空間について
- ・ 老人亭について 等

2. 調査結果

ヒアリング調査結果

●上溪住公アパート、住民に対するヒアリング調査結果(一例)

表1. ヒアリングシート(上溪)

ヒアリング対象者属性(家族構成等)	百さん(50代)女性 夫と2人暮らし(子供は独立)
ヒアリング日時	11月6日(日)
<居住歴・住居>	
●居住団地	・0団地
●居住年数	・19年
●入居前の居住地	
居住形態	・個人住宅
●このアパートに入居した動機	・新しい所に住みたいで、このあたりだと、抽選で当たる可能性が高かったから。
●このアパートに入居しての感想	・環境や交通の便が良いが、家が狭い。
●この団地内の他の居住者の住居を訪問することはあるか?	ある
●このアパート内で自分の住宅以外に気に入っている場所はどこか?	・公園
●このアパート内で自分の住宅以外に気に入らない場所はどこか?	・道路沿いの市道が汚い。
<共用空間について>	
●このアパート内の共用空間でよく利用する場所はあるか?	ある
それはどこか?	・公園
●以前はよく利用していたが、現在はあまり利用しなくなった共用空間はあるか?	ない
それはどこか?	
現在利用しなくなった理由は?	・体育施設(年齢別にできるもの。バリエーションが足りない)
●このアパート内にあつたらいいと思う共用空間は?	
<団地・近隣等について>	
●昔と比べて変化したこととは?	・樹木が大きくなった。
●団地内の住民との社会的活動への参加はあるか?	・親睦会や教会の活動。棟代表の会館に行ったことがある。校長(トンジョン)を4年間やったことがある。
●班常会に参加したことがあるか?	・班常会自体あまりやっていない。
●棟代表の人の間わり	ない
<老人亭について>	
●老人亭についてどのような認識を持っているか?どう思うか?	・具体的なプログラムがないので、老人になったらつくろ。最後の舞会。
<その他>	・統領をやろうと思った動機は、年齢的に時間の余裕ができてきて、好きな社会活動としてやろうと思った。目的活動として町の文化活動のためにプログラムをつくったりした。ヨガの先生を呼んだり。

●高德住公アパート、住民に対するヒアリング調査結果(一例)

表2. ヒアリングシート(高德)

ヒアリング対象者属性(家族構成等)	Nさん(39歳)女性 塾講師 夫と親子2人(12歳、9歳)
ヒアリング日時	11月3日(木)
<居住歴・住居>	
●居住団地	・7団地
●居住年数	・12年目
●入居前の居住地	・松坡、妻家(結婚して数ヶ月妻室に住んでいたが、大家さんが嫌で引越した)
●居住形態	・ヴィラ
●このアパートに入居した動機	・親戚(義理の母、姉)が団地内に住んでいる。
●このアパートに入居しての感想	
●この団地内の他の居住者の住居を訪問することはあるか?	
●このアパート内で自分の住宅以外に気に入っている場所はどこか?	
●このアパート内で自分の住宅以外に気に入らない場所はどこか?	
<共用空間について>	
●このアパート内の共用空間でよく利用する場所はどこか?	
●以前はよく利用していたが、現在はあまり利用しなくなった共用空間はあるか?	・子供が小さい頃は、体育センターを利用していた。
それはどこか?	
現在利用しなくなった理由は?	
●このアパート内にあつたらいいと思う共用空間は?	
<団地・近隣等について>	
●昔と比べて変化したこととは?	
●団地内の住民との社会的活動への参加はあるか?	・班常会はあるが、あまり行くことはない。1ヶ月に1回行われていたが、次第に少なくなってきた。
●班常会に参加したことがあるか?	
●棟代表の人の間わり	
<老人亭について>	
●老人亭についてどのような認識を持っているか?どう思うか?	
<その他>	・1992年に結婚。高德洞12年間のうち、3年間(1996～1999年)名古屋で生活。 ・自分の家を利用して塾を運営。30人の生徒に数学を教えている。塾が遠いため、団地内で習い事等(ピアノ、英語、数学・・・)を教えたりする人は結構いる。 ・友達の子供がみんな同じ小学校に通っている。学校にはPTAがある。 ・あと10年くらい経てば建て替えになるかもしれない。ソウルでは一般的に、一つのマンションに10年以上住んでいるのは意味がない。 ・現在の住宅の値段は7億ウォン。値段が高騰するのを法律で規定している。
●建て替えに関して	
●管理事務所との関係について	・管理事務所にいると意見を言える。設備などの修理は管理事務所申し出る。 ・管理費は冬 毎月30万ウォン、夏 毎月15万ウォン(管理費は、ソウルでは平均1坪あたり1万ウォン)
●住戸について	・実用面積(専有面積)は25.1坪(一般的には31坪という)。 ・名古屋では、3LDKに月1万5千円で生活していた。

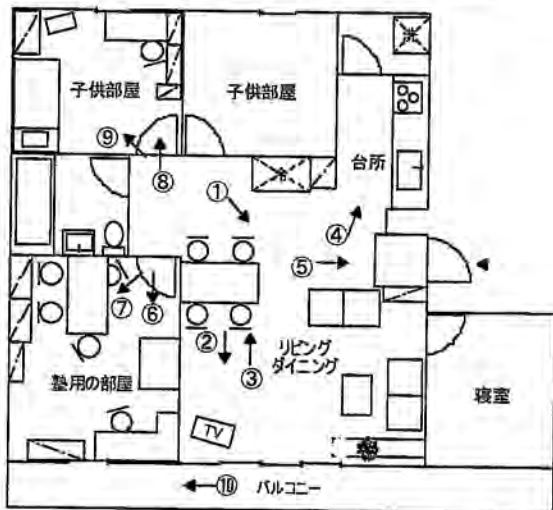


図2. Nさん宅の間取り

●管理事務所でのヒアリング調査結果（一例）

インタビューを通じて新たに認知した統長（トンジャン）、班長（パンジャン）という存在について記す。

統長（トンジャン）・班長（パンジャン）・棟代表について

統長・班長（共通事項）

- ・ 行政の仕事をしている。
- ・ 公務員ではない。
- ・ 住民なら誰でもなれる。 等

統長（準公務員）

地方自治団体傘下。区長→洞事務所

洞長の指示をもらい、行政末端組織の一つで、対住民と連結する役割をしながら、班長を活用している。

<仕事内容>

- ・ 税金に関わる仕事（納税の用紙を配る等）をする。
- ・ 男性は一度、戦争のための訓練（予備軍訓練）をする。そのための仕事をする。等

<その他>

- ・ 洞事務所で1人統長を選ぶ。
- ・ 任期4年
- ・ 給料がある。
- ・ 立候補→洞事務所が判断→区長が審査

班長

統長の指示をもらい、行政官署の指示または伝達事項を一般庶民に知らせる役割をする人。

<仕事内容>

- ・ 番常会を開くための準備。
- ・ 住民の入れ替わりの管理。
- ・ 住所・名前をすべて管理する。等

棟代表

アパートの棟別に入居者選挙によって選出する。棟住民の意見を代表会議に反映させる役割をする人。

議決機構の構成員＝入居者代表会議

- ・ 一つの団地の中で、各棟に1人棟代表を住民によって選び、その棟代表の中から1人住民代表を選ぶ。
- ・ 住民（入居者）代表会議＝棟代表が集まって行う会議（団地の中の法規を決めたりする。）等

組織図

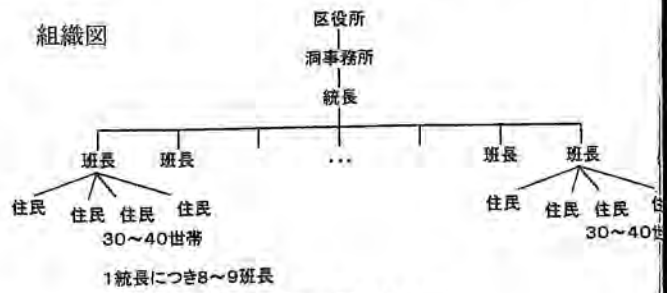


図3. 統長・班長組織図

●老人亭でのヒアリング調査（松坡、蚕室住公アパー
ト5団地老人亭） 1階—女性、2階—男性

[男性の部屋]（会長による回答）

- ・ 蚕室の住宅公社の団地人口＝170000人
- うち、高齢者人口＝6～700人（10％は老人夫婦で住んでいる）

<会員・会費>

- ・ 男性25名、
- 女性55名。
- 計約80名。



写真1. 男性は麻雀をしていた

うち、毎日来る人は男性10名、女性35～40名。

- ・ 毎食1000ウォン支給される。

→1（米）：1（人権費）：1（副食）

<自治活動>

- ・ 主な自治活動は、月1回行われる棟ごとの会議。

<その他>

- ・ 高齢者は子に財産を相続する。現在は相続に関して法律で定められている。

[女性の部屋]

<会員・会費>

- ・ 基本的に65歳以上の高齢者が利用。団地内の住民しか入れないが、以前住んでいた人が来た場合は受け入れる。
- ・ 年に10万ウォン、お米代として払う。
- ・ 会長と総務がいる。

<日常>

- ・ 女性は30～40人で毎日集まる。だいたい昼頃から5時まで老人亭で過ごす。
- ・ 毎月1回みんなで外食する。
- ・ 6年前から5日に1回車で野菜を売りに来る。

- ・ まったく男性との交流がない。
- ・ 息子夫婦と一緒に暮らしている人が多い。



写真2. 女性は床に座り談話していた

<団地の感想>

- ・ 住んでいて、交通の便が良いので便利。

<建て替えに関して>

- ・ 30年経ったのに建物はまだ建て替える必要はないと思っている人が大半。

<その他>

- ・ 20年間あまり変わらないという意見もあった。
- ・ 老人亭が充実しているため、団地内にあつたらいいと思う施設は特にならない。

3. 考察

3.1 老人亭についての考察

韓国の集合住宅団地において政策的に最初につくられた共用空間が老人亭であった。老人亭は当初は唯一の住民コミュニティ施設であり、高齢者のコミュニティ施設であった。しかし、その利用は、規定上60～65歳以上の高齢者と利用範囲が決められているので、一般住民の場合は利用しにくく、きっかけがない限り訪れない場所となっている。この韓国特有の伝統的な高齢者専用コミュニティ施設である老人亭を、いくつか事例を取り上げて調査していくと、団地の立地条件や住民の階層などの違いによるある特徴が見えてきた。

ここで、老人亭についてその歴史的背景について言及しておく。老人亭の歴史を遡ると李朝の太祖の時代の耆老所(シロウシヨ)というものに影響を受けている。耆老所は貴族の中で70歳以上の人が入れるものであったが、世宗8年(西暦1426)には今日の養老院のような発想に変わり、養老宴というものが制度として定着し、朴大統領の時に政策的に老人亭がつくられるようになり現在に至る。

老人亭を利用している人には、毎日通うという人が多く、午前10時頃から午後6時頃まで、一日を老人亭で過ごしている。過ごし方は主に女性は会話をしたり花札、カードゲームなどをしたりして過ごし、男性は

麻雀、囲碁、将棋をして過ごしている。男性は趣味活動のために、女性はくつろぎや付き合いのために利用している人が多い。

老人亭の大きな特徴は、男女の部屋がはっきりと分けられているということである。また、男女の部屋にもそれぞれ特徴がある。男性の部屋には会長用の大きな事務机があり、テーブル卓が置いてあるところが多く、女性の部屋にはキッチンが必ずあり、テーブル卓ではなくソファが置かれてあり、床の上で花札などをしている。男性は椅子座、女性は床座という特徴がある。普段は男女別れて過ごしているが、月1、2回、男女一緒に食事をする日があるというところが多く、それは上溪(サンゲ)、高德洞(コドクドン)、倉洞(チャンドン)、麻浦(マッポ)の事例で見られた。反対に、男女の交流が全くないという老人亭もあり、それは松坡(ソンパ)蚕室(チャムシル)5団地、ジャンミーアパート、盤浦(バンポ)で見られた。

上溪、高德洞、倉洞、麻浦はソウル市の中でも比較的住宅の価格が安く、一般庶民が多く住む地区であり、蚕室や盤浦は江南(カンナム)に位置し、住宅の価格が比較的高く、価格の高騰が著しいことで知られており、高所得の人が多く住む地区である。つまり、立地条件が良く、価格が高額なところでは老人亭において男女の仕切りがはっきりしており、ソウル中心街から少し離れた地区で家の価格が手頃なところでは、男女の交流があり、男女間の壁もあまりない。場所によっては(盤浦の団地を調査した時)老人亭がない団地もあった。地区の特徴と照らし合わせながら調査を行っていくと、所得層が低い団地ほど老人亭が活性化しており、所得層が高いほど男女の交流がなく、現に老人亭がないところもあるということを考えると、所得層の高いエリアではお金を使わないで楽しめるような高齢者の居場所はあまり重要ではないとの推測も可能である。所得層が高い団地の中でも、老人亭に足を運ぶ人は比較的所得の低い人たちであるという説明を頒布1団地の老人亭会長から受けた。

また、所得層に沿って老人亭に来る人たちの家族構成を見てみると、所得層の高いところでは長男と一緒に暮らしている人が多く、一人暮らしの人はほとんど

いない。それに対し所得層の低いところでは、一人暮らしの高齢者の数が比較的多かった。所得層による老人亭の位置付け、居住に関わる家族構成の違いは比較的顕著である。

次に、老人亭という存在についてその利用者と他の住民の視点で見ていく。

老人亭の利用者にとっては、老人亭はなくてはならないものであり、とても大切な存在だという意見が多かった。その一方で、他の住民にとっては老人亭に対する認識が薄く、大切だという意見も多くあるが、プログラムなどがはっきりしておらず、ただの暇つぶしの場所だという批判的な声もあった。このように、老人亭は利用者間の強いつながりをつくっている反面、それは閉じられた空間であり、そこから何かを発信するものではなく排他的な空間ともいえる。しかし、高齢者にとって、住まいの外に居場所があるということは同居の家族にとっても重要であり、時にはそれをサポートしようとする外部からの働き（婦人会や近隣の商店）があり、副次的にネットワークを生む存在にもなり得る。

今後の韓国の集合住宅団地において、老人亭を空間のしつらえやシステムの工夫によって、もっと開かれた空間にすることで、様々な人の拠点となる共用空間に発展し得るという契機を見ることができた。老人亭は計画のされ方によっては、団地内での世代を越えたコミュニティ形成の場として様々な可能性を秘めている。

3.2 管理事務所についての考察

管理事務所と住民との関係は、住民の入れ替わりの際の管理や、設備関連の問題等を住民から受け付け修理するなど、事務的な関係であることが分かった。住民の中で管理事務所との接点が多いのは棟代表で、住民の意見を管理事務所に伝達したり、管理事務所からの情報を住民に伝達したりと住民と管理事務所との間のやりとりをするような存在である。また、団地の棟代表が集まって行く棟代表会議というものがあり、管理事務所は住民に雇用されているため、その会議で管理事務所の所長を決定したりする。住民同士の意見を

出し合う場として、班常会という会議が月に1度行われている。会議といっても堅苦しいものではなく、フランクで自由な雰囲気だという。しかし、班常会に対する住民の意識は低く、最近はこの班常会自体がなくなり、住民同士の意見を交換し合う場が少なくなる傾向にある。班常会が残っていたとしてもその回数が減り、参加する人が少なくなっている。現在は個別に管理事務所へ意見を申し出すのが一般的のようだ。このように、住民は何かの目的を持って管理事務所を利用する。班常会が衰退する中で、管理事務所は住環境に関わる住民の意見が集約される場所となっており、住民にとっての拠点となる共用空間であるといえる。しかし、今回の調査では住民の代表と管理事務所のやりとりで直接触れることができず、管理事務所の所長からのヒアリングが中心となった。そのヒアリングからは所長の裁量が大きく、それによって団地全体の維持管理の程度が大きく異なっている様子が伺えた。

3.3 教会についての考察

今回、老人大学という布教以外の教会の役割が明らかとなった。教会も老人亭と同様、時には利用者限定する場所とも言えるが、それは外部へ開かれた空間であり、住民の拠点としてネットワーク形成に大いに貢献している。教会でのネットワークは住民間にとって、とても強いものとなっている。

老人大学のような開かれた空間は高齢者だけではなく、若い世代と高齢者との交流もあり、そこでは年齢、性別に関係なくネットワークが形成される。布教に限らずボランティア活動や老人大学等の活動を行うことで、様々な住民が教会を拠点として集まり、教会と住民との相互関係も生まれている。高德住公アパート7団地の教会のように、今後、教会が地域社会に対してビジョンを持ち、住民や地域社会に開かれた共用空間として存在し続けることの意味は大きいといえる。

3.4 韓国の住公アパートと日本の赤羽台団地との比較

赤羽台団地との比較において、①場所性、②住民の年齢層（上溪、高德洞は子育て期の人が多い）、③住棟

タイプ（上溪住公アパートは高層（9～25階建て）で片廊下型が多く、高德住公アパートは低層（5階建て）で階段室型がほとんどである）の違いはあるが、ポイントを絞って比較してみる。

[2]アンケート調査からの考察

問4. 団地内の他の居住者の住居を訪問することはあるか？

<上溪> N=37

団地内の他の居住者の住居を訪問することはあるか？

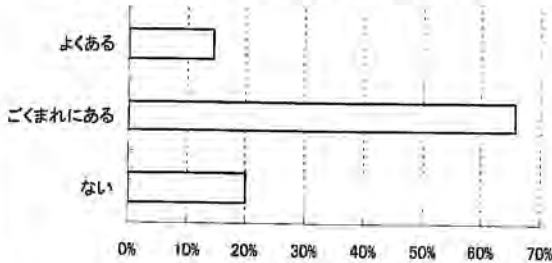


図4. 上溪における問4のアンケート結果

<高德洞> N=47

団地内の他の居住者の住居を訪問することはあるか？

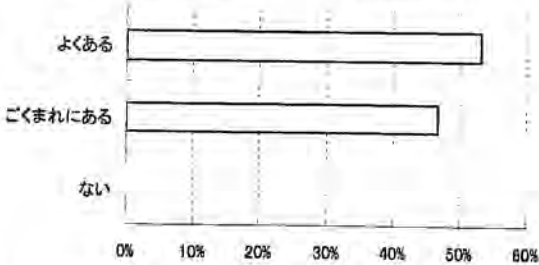


図5. 高德洞における問4のアンケート結果

<赤羽> N=220

団地の他の居住者の住居を訪問することはありますか？

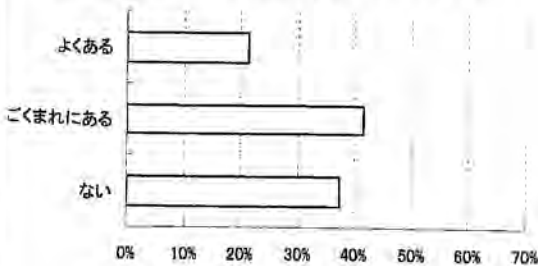


図6. 赤羽における問4のアンケート結果

問5. 各項目にあてはまるか？

ポイントは5段階評価で、「あてはまる」5点、「ややあてはまる」4点、「どちらでもない」3点、「ややあてはまらない」2点、「あてはまらない」1点とし、それらの平均を表に示した。

表3. 団地/アパート内での付き合いによるポイント評価

項目	赤羽	上溪	高德洞
1. 団地/アパート内での付き合いが少なくて気楽	3.81	2.86	1.26
2. 団地/アパート内で顔見知りができにくい	3.30	2.60	1.68
3. 住民同士でもっと気軽な付き合いがしたい	2.92	2.60	1.77
4. 中庭や公園がある団地/アパートに住んでいること自体が入居者同士の付き合いのきっかけになる	2.92	3.23	3.55

「1. 団地/アパート内での付き合いが少なくて気楽」の赤羽のポイントの高さから、赤羽では住民同士の付き合いがあまりないということが分かる。

「3. 住民同士でもっと気軽な付き合いがしたい」で高德洞のポイントが低いのは、現時点で、いろいろな人と気軽に付き合いができていますので、さらに気軽な付き合いがしたいと思うことはない、ということの表れだと考える。

問2の入居の動機として、赤羽台団地、上溪住公アパートは、駅から徒歩5分圏内に位置しているため、「駅から近い」を一番の動機にしている人が多く見受けられた。それに比べ、高德住公アパートの方は、団地敷地が広く、南北に長いので、駅から最も遠い住棟までは徒歩15分程かかる。このため、動機として「駅から近い」という項目はポイントが低かった。また、上溪、高德洞では、「知り合いが住んでいる」という項目に「あてはまる」「あてはまらない」の割合がどちらも約30%と、赤羽の15%に対して高い数値を示していることも大きな特徴である。抽選で当選したから入居したという人が多い赤羽に比べ、上溪、高德洞では家族や親戚、知り合いとのつながりの強さが伺える。

「団地内の施設が豊富」という項目を見ると、赤羽、上溪に比べ、高德洞のポイントが低い通り、団地内の施設や店舗の数が少なく、最低限の食品は入手できる

が、大きな生活用品等を買おうと思うと、隣の駅まで行かなければならないというのが現状で、買い物は車で隣の駅まで行く人がほとんどであった。そのため、「あったらいいと思う共用空間」という項目で、体育施設や、ショッピングセンター、図書館等、様々な回答があった。しかし、問2では表れてないが、高德洞に入居した動機として、「環境が良い」「自然が豊富で空気がきれい」という意見が多々見受けられた。

全体的に見て、赤羽、上溪に入居する人は、「利便性」を重視しているのに対し、高德洞に入居する人は、「自然環境の良さ、子供の成育に良い環境」というのを重視している人が多いと考えられる。実際に、自然が豊富で子育てには良い環境である。

赤羽（日本）と上溪、高德洞（韓国）の違いが見受けられたのは、問4、問5である。赤羽では「団地の他の居住者の住居を訪問することがある」と答えた人が約60%であるのに対し、上溪、高德洞では「団地の他の居住者の住居を訪問することがある」人は100%に近い値になった。韓国では、住棟内の住民の会議を居住者の自宅で行ったり、婦人会等の活動を誰かの家で行ったりなど、人を家に招くという習慣がある。日本では団地内の活動は、大抵集会所などの共用空間で行われるので、親しい間柄でない人を家に招くということは、最近の日本ではあまり見受けられないことである。上溪、高德洞では集会所がなく、団地の計画のされ方が異なることもあるが、このことは日本の赤羽とソウル上溪、高德洞との大きな違いといえる。今回調査したソウルの住公アパートの間取りを見ても、ほとんどが玄関を入るとすぐにリビングという形になっており、赤羽と比べてソウルの住居は、外に開放的になっている。

問8（6）、（7）でも「団地内で他の居住者と会った時」、「挨拶程度はする」「話をする」という人の割合が、赤羽に比べて上溪、高德洞は大きいという結果になっている。

問8（4）で、「共用空間に面した開口に関して、他の住戸の人々の目に触れることをどのように感じるか？」という問いに対し、赤羽では「あまり気にならない」の割合が高く、上溪、高德洞では「気になる」

という回答が多かった。私的空間が他人に見られてもあまり気にならないということは、他の居住者との距離が遠く、同じ団地住民であるが全くの他人としてとらえていると考えられる。反対に、私的空間が他人の目に触れるのが気になり、常に見られても良いようにしているということは、他の居住者との距離が近く、他の居住者を認知していると考えられる。

[2]ヒアリング調査からの考察

共用空間について、あったらいいと思う共用空間が「ない」という人や「考えたことがない」という人が多かった。また、高齢者は老人亭以外の共用空間は必要ないという人がほとんどであった。一方で、あったらいいと思う共用空間で「駐車場が足りない」と答えた人が多く、付加価値を見出す共用空間よりも、問題や不足を最低限補うための共用空間のほうが先決だということが伺える。気に入っている共用空間等で大半の人が「公園」と答えている。というのも、住宅が大量供給され始めた頃の韓国では、集合住宅団地を計画するにあたって共用空間という概念がなく、それを重点的に計画したという動きは見られなかった。韓国の集合住宅団地の中で、児童公園が数多く設けられており、共用空間というと公園というイメージが強い。全体的に見て、韓国の方が赤羽台団地よりも共用空間に対する意識が低い。これは、知人や住民との交流の場として住宅が機能しており、個人の住宅で解決されることが多く、赤羽のように住戸面積が狭く、それを補うための共用空間というものが不必要なためだと考えられる。

入居の動機として、赤羽では団地に憧れて入居したという人がほとんどであったのに対し、韓国では両親や兄弟が団地に住んでいる、または近くに住んでいるため引越してきたという回答が比較的多かった。韓国は日本に比べ家族間のつながりが強く、住居を選択する際、家族ネットワークが働いているといえる。また、他の動機として、上溪、高德洞とも「環境が良い」という回答が多かった。上溪、高德洞では子育て期の人が多く、子供も多い。家の価格が比較的安いこともあるが、子育て期が多いのは環境の良さにも起因する

と考えられる。子供が大きくなるにつれて、同じ団地内で少し広めの住居へ引っ越し人が多いということからも、子育ての関係もあるが「環境の良さ」が大きいといえる。

赤羽では婦人部や青年部、老人部、文化部などのサークル活動が多かったのに対し、韓国ではそのような活動は婦人会以外あまり行われていない。これは、友達や近所とのネットワーク、家族とのつながりが強く、それ同士で足りないものを補うような関係が確立されており、それ以上必要とされるコミュニティがないということが考えられる。

しかし、赤羽のようにサークル活動が活発になされ、そこからネットワークが形成されているわけではないが、老人亭や管理事務所、教会等の共用空間を拠点として様々なネットワークが確立されているということが明らかになった。(図7)

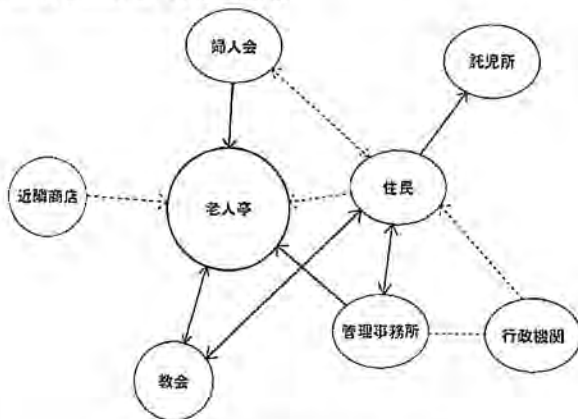


図7. 団地内のネットワーク図

第3章 結論

3.1 集合住宅におけるコミュニティ形成と共用空間の可能性

住宅供給の背景や集合住宅団地の計画などを概観し、日本と韓国の生活様式や居住形態に共通した要素が多く見られ、日本の現況と比較検討することが可能なのではないかと推測から調査に踏み切ったのであるが、今回、個別の事例を調査していく過程で、日本と韓国との生活文化の違いや家族とのつながり、その他の居住に関するネットワークの違いなどに、様々な発見があった。

今回調査した韓国の住公アパートでは、日本の赤羽

に比べて家族の中で、親子関係が強く、成人した子供と親が同居している事例が多く見られた。日本では、結婚すると独立して親と別々に住むケースが多いが、韓国では主に長男は結婚しても両親と一緒に住む、またはその近くに居住することが多い。つまり、「住居」という空間を選ぶにあたって、親族ネットワークが生きているといえるだろう。しかし、最近では、長男でも親と一緒に住まない人や、娘が子育て等の関係で、同居はしないが両親の近くに住むというケースも増えてきている。これは日本の傾向と似ている。

また、集合住宅団地の共用空間において、日本ではかつて住宅公団が中心に供給したのものには、集会所などの多目的な共用空間が設けられているのが一般的であったのに対し、韓国の集合住宅団地では、ある目的に特化しない共用空間は見受けられない。では、韓国の集合住宅団地の共用空間はどのような性質を持っているのだろうか。実態調査、アンケート調査、ヒアリング調査の結果から、それらは「行為」「人」「目的」という三つの要素に特化した空間として分類が可能であると考え、以下、その分類に沿って空間としての特質と、それが生み出すネットワークについて述べる。

①「行為」に特化した共用空間

これは行為のみを限定する共用空間であり、スポーツジム、エアロビクススタジオ、テニス場などの運動施設がこれに当てはまる。それら運動施設は大体一つの団地につき一箇所設けられている。地域暖房の跡を利用し、エアロビクススタジオとして転用しているところもあった。そこでもネットワークが形成されていた。

②「人」に特化した共用空間

これは人(年齢・性別など)のみを限定する共用空間であり、老人亭がこれに当てはまる。老人亭は高齢者が集い、談話やゲームなどをして過ごす空間で、「居場所としての共用空間」ともいえる。

③「目的」に特化した共用空間

これは目的のみを限定する共用空間であり、管理事務所や教会がこれに当てはまる。管理事務所は集合住宅団地の維持や管理という目的のために設置されたも

のであり、教会は親交と布教という目的のために設置されたものである。これらは様々な住民が利用するため、「拠点としての共用空間」ともいえる。これらは開かれた共用空間であり、弱く広いネットワークをつくる共用空間である。現に教会では、コーラス、体操、語学教室など様々なプログラムを用意してあり、開かれた人間関係をつくることにも貢献している。

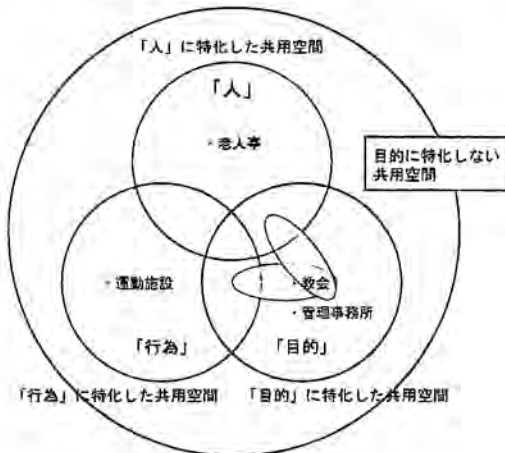


図8

この他、日本の集会所、多目的室のように、目的を特定しない共用空間がない代わりに、婦人会などの団地内の社会的活動は住民の住宅を利用して行われている。このことを考えると、韓国では「住宅」が多目的な共用空間の代替になっており、玄関から居間に直接入るプランは、住宅の部分が公的に開かれることと対応している。

赤羽では集会所という共用空間が先に与えられ、それがあつたことにより、団地内にサークル活動が生まれ成立していった。集会所という共用空間の存在は、コミュニティ形成の場として活用されていた。幼児部の幼児教室の活動を行ったり、婦人部や文化部などの親睦目的で利用したりと、集会所がサークル活動の拠点となっていた。赤羽のように、共用の空間が与えられて、そこからネットワークが誕生し発展していくのに対し、韓国の集合住宅団地では住宅が外に開かれていることで婦人会や班常会（バンサンヘ）などが住宅の中で行われ、そこでネットワークが形成される。

赤羽と今回調査した韓国の住公アパートとの集合住宅計画の大きな違いは、老人亭の存在である。日本の団地が高齢化していく中、一人ひっそりと暮らしてい

る老人が多いのに対し、韓国の集合住宅団地では老人亭という高齢者が集まれる空間、居場所があるということは評価すべき点である。老人亭は決してそこから外部に何かを発信するものではないが、それをサポートしようとする外部からの働きがあり、副次的にネットワークをつくるという機能も果たしているといえる。団地によって異なるが、小学校教育プログラムの一環として、老人亭の掃除をするなど、若い世代と高齢者との交流があることも、赤羽では見受けることができなかったことだ。現在の老人亭は、「居場所としての共用空間」として、閉じたネットワークの形成に関与している。そこでは、限定的ではあるが利用者間の強いつながりがつくりだされている。それはしばしば排他的で同質性を求められる空間ともなるが、利用者にとっては、なくてはならない存在ともなっている。現在の老人亭は、利用者の数も多くはなく比較的クローズな空間であるが、それが高齢者に限らず他の住民にとっての「拠点的な共用空間」となることで、周りからのサポートが生まれ、副次的なネットワークを生む存在として発展的な共用空間となり得る。私的空間でもなく、完全にパブリックな空間でもない空間が、共用空間として用意されていることの意味は大きい。

赤羽台団地では目的に特化しない共用空間が設けられ、そこでは多角的なネットワークが生まれたが、誰かの居場所として機能することはなかった。一方、ソウルの上溪、高徳洞では、何かに特化した共用空間が設けられ、それは居場所としての共用空間となり得るが、閉じられた空間として限られたネットワーク形成に関与することとなった。

これら二つの要素を持つ共用空間を連携させ、「行為」「人」「目的」に特化した空間、及び目的に特化しない空間という、類別した四つの性質の共用空間が共存することで、住民間に強弱のある連携が生まれ、同時に住民は複数のネットワークを持つことが可能となる。(図8)

主要な参考文献・資料

[1] 海老塚 良吉、「韓国の住宅事情と住宅政策の概況」, 住宅・都市整備公団 住宅都市総合研究所, 1998

[2] 20世紀建築研究編集委員会:「20世紀建築研究」, I N A X出版, 1998